

臨床検査専門領域における英語教育の現状

中野 京子*1§ 佐藤 剛*1 中村 敏也*1
佐藤 公彦*1 三浦 富智*2 木田 和幸*3

はじめに

平成12年10月、弘前大学医療技術短期大学部から医学部保健学科への移行に伴い、検査技術科学専攻では、専門領域における英語の授業を4年次学生に「医学英語」として新たに開講した。平成16年度から実際の授業が開始されたが、卒業研究指導教員が自分の担当する学生のみを対象として教員の専門領域の英語を教えていたので、内容に非常に大きなバラツキが生じた。19年度のカリキュラム変更を機会に、授業内容、方法の見直しをはかり、3年次学生に「検査科学英語演習」として開講した。4人の教員によるオムニバス授業で、文献読解を中心に、グループワークや学生によるプレゼンテーションを採り入れた。授業内容、方法は改善されつつあるが、未だ試行錯誤の状態にある。そこで、他の養成施設では専門領域における英語教育をどのように実施しているのか現状を把握し、より良い英語教育の一助とするため、アンケート調査を実施した。

I. 対象および方法

日本臨床検査学教育協議会の会員74校(大学38、短大6、専門学校30)を対象として、平成19年3月1日~23日にアンケート調査を実施した。

アンケート調査内容は表1に示すとおりである。

II. 結 果

① アンケート回収率は45校(大学27、短大5、専門学校13)で60.8%であった。

② 専門領域における英語の授業実施率は36校(大学21、短大4、専門学校11)で80.0%であった。実施していないと回答した施設でも、まったく行っていないという訳ではなく、専門科目の授業や卒業研究の中に内容を盛り込んでいた。

③ 授業実施時期は2年次前期が最も多く、実施期間は半年が20校55.6%であった。2年間実施している施設も3校8.3%あった(図1)。

④ 授業の目標は、論文読解44.6%、抄録作成4.6%、学会発表1.5%、情報収集15.4%、国際感覚の涵養18.5%、その他15.4%であった(図2)。その他として、専門用語や語法の習得、海外での活躍、外人患者とのコミュニケーションなどがあった。

⑤ 授業担当教員数は1人で担当が48.5%であり、平均すると3.2人であった。最大教員数は16人であった。

⑥ 授業形態は講義51.7%、グループワーク24.1%、発表会13.8%、その他10.4%であった。その他として演習、抄読会、LL教室があった。

*1 弘前大学大学院保健学研究科 医療生命科学領域生体機能科学分野 § n1220@cc.hirosaki-u.ac.jp

*2 同 医療生命科学領域病態解析科学分野

*3 同 健康支援科学領域健康増進科学分野

表1 アンケート内容

専門領域における英語教育に関するアンケート

(該当する部分に○印、あるいは書込みをお願いいたします。)

I. 貴施設名をお書き下さい。()

II. 医学英語あるいは専門領域における英語の授業を実施していますか。
 1. 実施している 2. 実施していない(以下項目Ⅶをお答え下さい)

III. 実施している場合、何年次の学生にいつ実施していますか。
 (学年: 1. 2. 3. 4年次) (時期: 前期、後期、通年)
 (その他)

IV. 医学英語あるいは専門領域における英語の授業の目標をどこに設定していますか。
 (複数回答可)
 A. 英文論文を読解できる。
 B. 英文抄録を書ける。
 C. 英語による学会発表ができる。
 D. 英語による情報収集ができる。
 E. 国際感覚を養う。
 F. その他()

V. 授業方法についてお聞きます。
 1. 授業は何人の教員で担当していますか。(人)
 2. 授業形態はどのようなものですか。(複数回答可)
 A. 講義
 B. グループワーク
 C. 発表会
 D. その他()

3. 教材として何を使用していますか。(複数回答可)
 A. 市販のテキスト
 (テキスト名: 出版社:)
 B. 教員作成のプリント
 C. 論文
 D. その他()

4. 学生の成績評価についてどのように行っていますか。(複数回答可)
 A. 筆記試験
 B. レポート提出
 C. 発表会での評価
 D. 出席点
 E. その他()

VI. 医学英語あるいは専門領域における英語の授業を実施するにあたって、貴施設において工夫している点や、特に留意している点がありましたら、ご自由にお書き下さい。

Ⅶ. 専門領域における英語教育全般についてのご意見をご自由にお書き下さい。

(一部用語を訂正)

⑦ 使用教材は市販テキスト 33.9%、教員作成プリント 37.3%、論文 20.3%、その他 8.5%であった。その他にはオンラインジャーナル、英字新

聞などがあつた。

⑧ 成績評価方法として筆記試験 37.5%、レポート 20.0%、発表会 8.7%、出席点 23.8%、その他

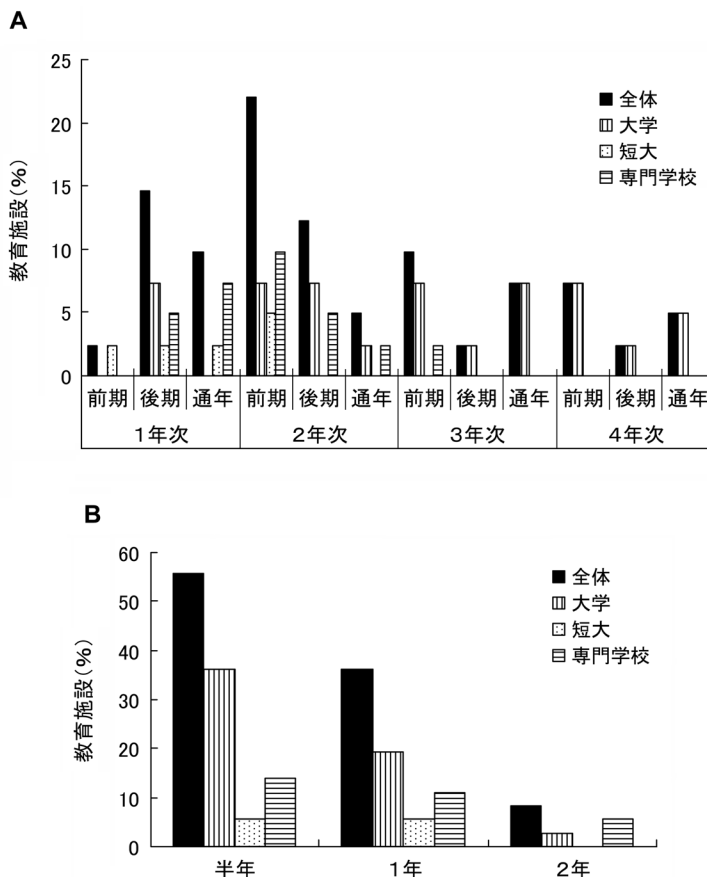


図1 授業実施時期(A)と実施期間(B)

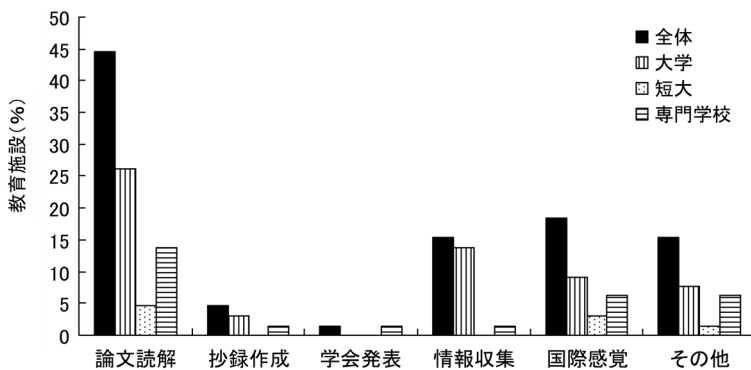


図2 授業の目標

10.0%であった(図3)。その他には小テスト、口頭試験などがあった。

⑨ 授業での工夫点は多数挙げられ、代表的な

ものを表2に示した。

⑩ 専門領域における英語教育全般に対する意見の代表的なものを以下に示した。

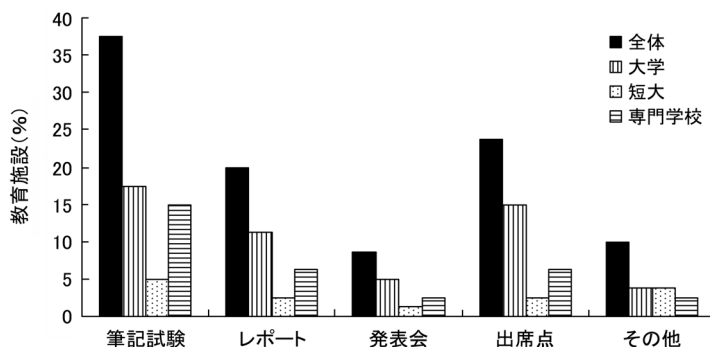


図3 成績評価方法

表2 授業の工夫点

学生の興味やレベルの違いを解消する授業

- ・学生の英語のレベルにかなりの開きがあるが、多くの時間を学生が活動できるようグループワーク、ペアワークを行っている。
- ・医療英語、科学英語に慣れさせる。専門用語の解説を行う。学生には興味のあるテーマを発表させる。
- ・インターネットを利用して最新の医学情報を引き出し、各自の興味あるテーマを選択し、自発的に学習する英語教育を心がける。
- ・レベル的に十分でないので、授業の半分を全員で予習をさせ、残りを授業までに予習させた担当グループの学生に抄読させる。
- ・医学専門分野の英文を読む前に新聞のコラムにある一般的な医療に関する英文を読み、医学英語に対するアレルギーを和らげている。
- ・高校卒業時点での英語力に差が生じているため、クラスを「英文文献読解」と「基本英文法」の2つに分けて実施している。

卒業研究と連携した文献講読

- ・原著講読の科目を設けて、卒業研究と同時に開講し、研究指導の一環として文献講読を行っている。
- ・特論研究で担当教員が英文論文読解指導を行っている。
- ・1～3年次に専門分野別の特別演習を開講し、英文文献の抄読を行っている。4年次の卒業研究時にもより専門的な英文文献の抄読を行っている。

英語教員、native speaker による授業・交流会

- ・native speaker による授業と日本人教員による授業を行っている。
- ・外国学生との交流会を毎年実施している。
- ・native speaker による「医療英会話」を必修科目として実施している。
- ・英語教員と専門領域の教員が協力して教養英語の後に科学英語の導入を行っている。言葉の厳密性について特に説明をしている。

授業時間外の指導

- ・学生によって、英語に求めるものが違うので、授業外で留学、検定、進学等の指導をしている。
- ・毎朝8:10～8:35の25分間、自由参加者に「病理学」の原書を読解させている。
- ・TOEICなどの受験をするため、希望者に対し課外授業を実施している。

その他の工夫

- ・必修科目である「形態学」「科学論文演習」「臨床病態学」を100%英語で実施している。
- ・ERのDVDを使用し、独自のプリント作成している。
- ・専門用語の構成法や科学英語の語法習得を集中的に展開し、ロールプレイにより臨床検査技師の活動を学ぶ。

1. 大学からの意見

- ・英語での診療、学会発表、論文執筆を最終目標とし、医療人に求められる英語力を総合的に体系的に学んでいただきたい。
- ・医学部保健学科の専門科目における英語の重要性を理解してもらうため、一般教養の英語教育とは異なる責務が求められていると思う。単に英文読解をするのではなく、医学情報の収集と発信が重要であり、専門領域における応用面を理解させることが大切である。
- ・英語の基礎学力不足が指摘されている。教養と専門の英語を別々に考えるのではなく、体系的に英語学習を進めていくべきだと思っている。
- ・毎日、学生にできるだけ多くの英語に触れさせることがキーポイントで、専門用語は英語でも身につけさせるなど、英語教員だけでなく教員全員が一致して実行することが必要と思う。
- ・医学研究における英語の重要性は極めて高く、増加しつつある現状と思う。学部教育では英文論文の読解力をつけさせるよう努力しているが、それだけでは不十分で、今後、「書かせる」「話させる」英語教育も必要と感じている。
- ・専門領域における英語の教育については、誰がどのような内容でどのように行うかが問題である。語学教育センターと共同で実施できるよう計画中であるが、教員の負担が大きく困難が予想される。
- ・専門科目内において英文教材の活用や、卒業研究で配属された研究室において抄読会が実施されている。特別に科目立てをしても教員の負担のみ増加してしまう。

2. 短大からの意見

- ・卒業後に役立つ英語を教えたいが実態が把握できず、卒業生の意見を聞く必要がある。
- ・専門教育における英語教育の目標をどこに定めるか難しい。
- ・専門の英文読解は半年だけでは不十分であり、中長期に行っていく必要がある。

3. 専門学校からの意見

- ・大学病院等の就職試験に英語が課せられているため、応募学生が皆無である。従って、専門学

校受験者にも入試センター試験を義務付けたいが、学生確保が困難である。

- ・複数の臨床の医師に担当してもらい、臨床的な論文や文献などを使用してもらい、学生には身近に感じられるところであるが、経営的な面や試験の配点など苦労している。
- ・将来、研究的な方向を目指すケースでも、英語教育は重要な位置を占めている。
- ・「医学英語」を専門としない英語教員に対して研修制度のようなものがあると良いのではないか。
- ・医学英語の必要性は実感しているものの、3年間という教育期間内では学生のレベル低下があり、一般的英語教育で一杯である。

III. 考 察

臨床検査技師教育において、専門科目の内容について数多くの検討が加えられ改善されてきている。しかし、専門領域における英語教育についてはその重要性が認識されつつも、これまで議論の対象となることはなかった。本専攻では、四年制課程への移行を機に専門領域における英語の授業を開始したが、未だに手探り状態である。そこで、他の養成施設の英語教育の状況を把握し参考とするため、アンケート調査に至った。アンケート結果から、8割の施設で英語授業が実施されていた。授業実施期間は半年～2年、担当教員数は1～16人で、施設間でのバラツキが大きい。多くは半年の実施で、平均3.2人の教員が担当していた。授業形態は講義が主体で、論文読解を中心に、教員作成のプリントが教材として多用され、成績評価は筆記試験によるものが多かった。学生の英語力の差、興味の差を解消すべく教員による様々な工夫が行われ、native speakerによる授業や授業時間外の指導も熱心に行われていた。しかし、教育内容や方法について施設間での格差も大きく、今後、体系的な取組みが必要と思われた。専門領域の英語教育全般に対する意見からは、英語教育の重要性が認識されながらも、様々な制約の中でどのレベルまで学生に習得させるべきか、模索している状況が窺われた。

臨床検査技師教育における専門領域の英語教育では、主に英文論文の読解及び英語による情報収集ができることを目標とし、英語による学会発表や論文作成は大学院課程で習得できれば良いのではないかと考える。それ故、教員は基本的に専門用語の解説や語法の説明を行い、論文読解を指導するのが最も適切ではないかと考えられた。また、英語に触れる様々な機会を多く提供することで、学生は英語に慣れ自発的な学習をするようになる

ことを期待したい。

最後に、高度な専門性をもつ人材の育成課程において英語教育の果たす役割はきわめて大きく、今後、英語教育の実施方法について教育施設間で活発な意見交換・議論が行われ、改善が図られていくことを期待したい。

本稿の要旨は、第2回日本臨床検査学教育学会学術大会(高松)において発表した。